12

国　語　問　題　紙

法 学 部１・２部

人文学部１・２部（日本文化学科）

2023 年 2 月 12 日

法学部１・２部，人文学部２部（日本文化学科）は　11：50 ～ 12：50（60分）

人文学部１部（日本文化学科）は　11：50 ～ 13：10（80分）

注　意　事　項

── 注意事項は裏表紙にもある。問題紙を裏返して必ず読むこと。──

1．国語の問題紙は全24ページである。

受験する学部（１・２部の区別を含む）に該当する問題の番号と解答用紙の色を下表で確認すること。

学　部　名	問題番号	解答用紙
法 学 部１・２部 人文学部２部（日本文化学科）	一 二	白　色
人文学部１部（日本文化学科）	一 二 三	水　色

2．解答用紙は問題紙の中に折り込まれている。

3．解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入すること。

4．試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

試験終了まで退室してはいけない。

5．受験番号の記入については裏表紙を参照すること。

国Ⅲ

一

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

注 歴史家論争のもう一つの中心的議論は、歴史の政治利用の問題であった。

ドイツの論争が世界で関心を集めたのは、1どの国にも国家アイデンティティを強化することを目的とした歴史記述があり、歴史はその2担い手であるべきか議論されてきたからだ。多かれ少なかれ、それぞれの国の「歴史家論争」がある。

たとえば日本だ。日本は敗戦国として、加害国として、過去をどのように記述するか長く苦心してきた。日本人の犠牲者だけでなく、アジアの犠牲者をも悼む歴史記述が、国民的合意を得ることは難しかった。

一九九〇年代後半には、第二次世界大戦をより肯定的に記述することで「自虐史観」からの脱却を図ると主張する団体も生まれ、「新しい歴史教科書をつくる会」（略称、「つくる会」）を名乗った。「つくる会」は日本人として誇りを持てる歴史を提示することで、歴史を国民の紐帯（ちゅうたい）とし、愛国心を高めると謳っていたが、こうした議論はドイツとそっくりである。

では、3歴史家論争では具体的にどのような点が歴史の政治利用と言われたのだろうか。

たとえばエアランゲン大学の現代史家、ミヒャエル・シュテュルマーだ。彼はコール政権の歴史政策に関わり、「歴史はアイデンティティへの道標を約束する」と言って憚らなかった。

彼は一九八六年四月の『フランクフルター・アルゲマイネ』紙上で、4「歴史なき国における歴史」という論考で次のように記している。「歴史なき国において将来を獲（か）ちえるのは、記憶を満たし、概念を定め、そして過去を解釈する者である」と。

この言葉は、ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』を思い出させる。主人公ウィンストンは、全体主義的な国で党の命令を受けて過去の改竄を行っている。党のスローガンは言う。「過去をコントロールするものは未来をコントロールし、現在をコントロールするものは過去をコントロールする」

シュテュルマーは、歴史を国民意識のバックボーンとし、歴史家が意味の創造者となることを是認する。彼は、ドイツ国民が一体となれるような歴史認識が必要だと考えていた。なぜなら歴史なき民は根無し草であり、共同体として、国民として団結することができない。そうした国家は外部からの挑戦に立ち向かうことができず、国際政治における国家間の熾烈（しれつ）な争いを生き抜くことはできないからだという。

歴史家論争…西ドイツで起こった論争。その中心的議論は二つあり、一つはホロコーストの問題、もう一つは歴史の政治利用の問題であった。

国Ⅲ

しかし現実には、ドイツ人のナチ時代に対する歴史認識は世代で断絶し、連続性がないとシュテュルマーは嘆く。国家への帰属意識を持たすことは、東ドイツと国境線で対峙していた西ドイツにとっては、十分に死活問題であったにもかかわらず。

シュテュルマーのように、歴史の解釈を国家の利益や政策と結び付ける考えは、一部の政治家と共鳴する。たとえば歴史家論争当時、政権与党のキリスト教民主・社会同盟の院内総務を務めていたアルフレート・ドレッガー（一九二〇―二〇〇二）である。

ドレッガーもシュテュルマーのように共通の「歴史の喪失」を嘆いていたが、これは戦後ドイツによるナチの過去との取り組み方のせいだと考えていた。「いわゆる〈過去の克服〉はたしかに必要なことであったが、われわれの国民から未来を奪い取るためにこれを乱用する者に、われわれは異議を申し立てる必要がある」とドレッガーは言う。ナチズムの過去と向き合うための政治的・教育的取り組みが、健全な愛国心の育成を阻害し、ドイツの未来を損じたというわけだ。

これらに対してハーバーマスは、現在に奉仕させるための歴史を書くことを歴史修正主義と批判した。ところが、シュテュルマーやその後ろに控える政権保守派は、国家のよりよい未来のために肯定的な歴史を書くことのいったい何が悪いのか、と開き直るかのようであった。

国家にとって、民主主義的な価値と社会的責任感を持つ市民の育成が重要であることは、言うまでもない。国民が歴史を共有することによって、つまり自身を国の歴史の一部だと感じることで、積極的に共同体と関わることができるならば、誰もが誇れる歴史を提示することに問題があるのだろうか。「歴史の政治利用がなぜ悪いのか」という問いに対して、歴史学はどのように答えるのだろうか。

★

まず、歴史を書く際の基本的な姿勢に立ち戻る必要がある。ランケは、歴史家は「実際にいかにあったか」を記すべきであり、歴史学の役割は過去の過ちから教訓を垂れたり、未来への指針としたりすることではないと言った。可能なかぎり客観的に、価値中立的に歴史を記すことが、ランケ以降は歴史学の合意事項となっている。

また、歴史とは全体のことであり、任意の点だけを線で結んでつなぐことではない。現状を正当化するのに都合のよい事実だけを選び出して歴史を書けば、実際に起こったことからかけ離れた姿になるだろう。

ところが、国家の利益になるような歴史を示すことに、特に問題はないと考える政治家は多い。それは、これまで歴史とは、基本的に国のための物語であったからだろう。歴史と言えば「国民史」（ナショナルヒストリー）であり、国や民

国Ⅲ

族の歴史は多くの場合に対立する国や民族との関係性のなかで記されてきた。このため小国の歴史は、周辺の大国への抵抗の語りに終始してきた。また広範な抑圧を伴った植民地帝国の歴史は、「未開」の地に「文明」の恩恵をもたらす物語として正当化されてきた。

こうした伝統的な歴史記述に対して、歴史を書く主体としての地位を奪われていた人々からの異議申し立てが行われるようになって久しい。マイノリティの歴史、女性の歴史、植民地の歴史など、主流派以外の歴史が書かれるようになった。さらには近年「グローバルヒストリー」と呼ばれる、国家や地域を越えた交流など、相互作用から歴史を記す流れもある。

国の枠組みを超えた歴史を書く試みは、たとえばドイツとフランスで共通の歴史教科書が作られたり、「ヨーロッパ」を一つの単位として捉え直す流れにも見られる。

ナショナルヒストリーの枠組みが維持されるアジアでさえ、自国中心主義的でバランスを欠く歴史記述は軋轢（あつれき）を生みやすいため、一定の抑制がきくようになっている。物や人の流れが［　①　］化した現代では、歴史記述が経済的利益と連動するようになっているからだ。このため現在では、国家中心主義的な歴史観を全面的に打ち出す国は、独裁国家くらいしかなくなっている。

たしかに国民のアイデンティティを鼓舞する歴史記述は、国民の帰属意識を強化する肯定的な側面がある。だが、それゆえに対外的な対立が長期化する要因ともなる。[6]自国を自画自賛する歴史、もしくは逆に犠牲の側面ばかりを強調する歴史は、他者が他者であり続けることを前提としている。それは交渉の可能性を排除し、将来に取り得る選択肢を限定する。つまり、対立を再生産するのである。

たとえばパレスチナ問題の歴史について、パレスチナ人とユダヤ人の記述はまったく異なる。ユダヤ人は長い流浪の時代から筆を起こして、悲劇の後についに実現したユダヤ人国家を守る歴史として描く。対してパレスチナ人には、よそ者に突然故郷を追われた苦しみと、抑圧からの解放への闘いの歴史である。

アルメニア人虐殺をめぐるアルメニア人とトルコ人の記述の隔たり、慰安婦についての韓国と日本の記述の相違など、数多く存在する。これらは本来、並列で対置すべきものではない。[7]両者を一つの歴史の二つの解釈と位置付けるところに、歴史修正主義が紛れ込むからだ。

しかし、対立に基づく歴史観に慣らされた人々は、国益だと国が説くものを守ることが愛国心であるという単純な等式

を受け入れやすい。問題はこれが、他者と見なした集団の排除を誘発し、さらなる他者が生み出されることである。

自国中心の歴史記述により、国内の団結は維持できるかもしれない。しかし長期的に見ると、自国民のみが満足する歴史は、将来の選択肢をせばめている。対立が持続することによって、失われる機会も多いからだ。つまり国家アイデンティティを強化することを目的とする歴史記述は、実は利益にさえならない可能性が高いのだ。

（武井彩佳『歴史修正主義』による。ただし一部変更した。）

問一 本文にある次の漢字の傍線部の読みをひらがなで書け（なお、明確に判読できない解答は不正解とする）。

A 悼む　B 阻害　C 流浪　D 紛れ込む

問二 傍線1「どの国にも国家アイデンティティを強化することを目的とした歴史記述があり」とあるが、このような歴史記述は何と呼ばれてきたか。該当する言葉を本文から三字で正確に抜き出せ（なお、明確に判読できない解答は不正解とする）。

問三 傍線2「その」が指す言葉は何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 政治
イ 論争
ウ 世界の関心
エ 国
オ 国家アイデンティティを強化すること
カ 歴史記述

問四 傍線３「歴史家論争では具体的にどのような点が歴史の政治利用と言われたのだろうか」とあるが、その答えとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　ミヒャエル・シュテュルマーという人物そのもの
イ　コール政権を維持するために、ナチズムの過去を都合よく改竄したこと
ウ　戦前にドイツ国民を結び付けていた共通の歴史が失われたこと
エ　世代間の対立を歴史問題にすり替えたこと
オ　戦後ドイツにおけるナチズムの過去の克服に向けられた取り組みが過剰であったこと
カ　東ドイツに対抗して国家を存続させるために、国民を統一する役割を歴史に求めたこと

問五 傍線４「歴史なき国」とはどのような状態の国家を表現したものか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　誕生してから時間が経っていない国家
イ　歴史記述の乱立によって国民の歴史認識が一致しなくなった国家
ウ　戦渦によって歴史を知る人物や史料が失われた国家
エ　歴史が国民を自ずと団結させるような精神的支柱として機能していない国家
オ　歴史以外のものが国民意識のバックボーンとなっている国家
カ　国民的合意が得られるような歴史政策を打ち出すことができない国家

問六 傍線５「自身を国の歴史の一部だと感じることで、積極的に共同体と関わることができる」とあるが、これと反対の状態を意味する比喩表現を本文冒頭から傍線５までの間より四字で正確に抜き出せ（なお、明確に判読できない解答は不正解とする）。

問七 ★の箇所の内容に基づいて正しいと判断できる記述を次の中からすべて選び、ア～オの順で符号で答えよ。なお、正しいと判断できる記述が一つもない場合は、カと答えよ。

ア　歴史家は意味の創造者となってよい。

イ　歴史が国民意識を強化することはあってはならない。

ウ　歴史は起こった出来事の善悪を問うことなく記述されるべきである。

エ　歴史を記述する者には、主観を排除するための最大限の努力が求められる。

オ　歴史家が国益や政策のために事実を取捨選択することは許されない。

問八 空欄①に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　ローカル　イ　グローバル　ウ　グローカル　エ　普遍　オ　不偏　カ　不変

問九 傍線6「対外的な対立が長期化する要因ともなる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　ナショナルヒストリーの枠組みに基づいた国のための歴史記述が、物流と人流を妨げて経済的利益を損なうから。

イ　国家アイデンティティを強化する歴史記述は、他者が他者のままであることが前提なので、原理的に歩み寄りや融和の余地がないから。

ウ　国家アイデンティティを鼓舞する歴史記述は、国のいう国益を守ることが愛国心であるという国民の認識を強化するから。

エ　自国を自画自賛する歴史や自国の犠牲ばかりを強調する歴史は、対立の再生産を目的としているから。

オ　対立する国や民族の歴史記述の間の隔たりを解消することは容易ではなく、長い年月を要するから。

カ　国家アイデンティティを鼓舞する歴史記述は、対立を長期的に持続させる結果、交渉の機会を失わせ、選択肢を少なくするから。

国

問十　傍線7「両者を一つの歴史の二つの解釈と位置付けるところに、歴史修正主義が紛れ込むからだ。」とあるが、これはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　対立する国や民族の歴史記述を対置することは、過去の出来事を別の視点から語っているようにみせかけて、現在の政治的意図や目的を達成しようとする余地を残してしまうということ。

イ　対立する国や民族の歴史記述がグローバルヒストリーの枠組みに移行せず、互いにナショナルヒストリーの枠組みにとどまっていることにつけ込んで、それぞれが歴史を政治利用するようになるということ。

ウ　対立する国や民族の歴史記述は、いずれも、多かれ少なかれ、国益や政策に結びつけられて現在に奉仕させられるものであるから、それらを並列して対置しても意味がないということ。

エ　異なる国や民族の歴史記述は、同一の歴史に基づくものではないにもかかわらず、一つの歴史をそれぞれの立場から書いたものと位置付けられてしまうために、歴史を修正した記述だと受け止められることが少なくないということ。

オ　対立する国や民族の歴史記述を対置することは、記述の相違を歴史の多様な見方として許容することになるので、記述を突き合わせて実際の出来事を確定することが疎かにされて、不確定な歴史記述がなかなか取り除かれないということ。

カ　対立する国や民族の歴史記述を並立させると、その中に現状を正当化するのに都合のよい歴史記述が混ざり込んでいた場合に、対立が長期化してしまう可能性があるということ。

国Ⅲ

問十一 次の文のうち、本文の内容と合致するものをすべて選び、ア～オの順で符号で答えよ。なお、本文の内容と合致するものが一つもない場合は、カと答えよ。

ア　歴史の政治利用はどの国にも見られるが、第二次世界大戦の敗戦国では特に顕著である。

イ　ドレッガーは、政治家であるがゆえに、現代史家であるシュテュルマーよりも鋭敏に、共通の「歴史の喪失」の原因が戦後ドイツのナチの過去に対する取り組みにあることを見抜くことができた。

ウ　従来のナショナルヒストリーは、国のために書かれる物語であったがゆえに歴史学の基本的姿勢と相容れなかったことに加えて、主流派以外の歴史記述や国の枠組みを超えた歴史記述の試みが普及したために、もはや維持することができなくなった。

エ　国家アイデンティティを鼓舞する歴史記述は、自国民を団結させるかもしれないが、他者の排除を誘発し、さらなる他者を生み出すような対立の再生産にも繋がる。

オ　著者は、国家にとって現在の利益をもたらすように見える歴史記述であっても、国を超える枠組みから見た場合には、将来的に自国民の利益にもならない公算が大きいと考えている。

国 二

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

作詩体験自体を述べることは私にはない詩人の特権である。ただ、私は十数年前、フランスの詩人ポール・ヴァレリー（一八七一―一九四五）の詩を翻訳して出版してしまったことがある（『若きパルク／魅惑』みすず書房、一九九五年／改訂普及版二〇〇三年）。この訳詩体験から遡って作詩体験をかいまみよう。さいわい、この詩人は自己の作詩体験について具体的に述べている人である。それは、アンリ・ポアンカレ[注]が数学を生み出す体験について述べているのに似ている。その一部は私どもにも追体験できるようなものである。

この詩人は、十三歳のころから詩作を始め、二十歳にして当時のフランス詩壇の「詩王」マラルメに認められ、その晩年に末っ子弟子の特権を享受する。しかし、まもなく二十一歳の秋、不眠の一夜にヌウス（理性）とエロスとがライ[a]鳴の中で闘う体験を契機に詩作を放棄して「大沈黙」に入り、数学に没頭する。しかし、一九一二年に、親友アンドレ・ジッドの勧めに従って、若い時の詩と散文を整理して出版しようとして、その冒頭に一つの詩を置くことを考えているうちに「詩的状態」に入り、第一次大戦の圧力に抗して五百十二行の長詩『若きパルク』を一九一七年に完成、続いてフランス古典詩のいろいろな形式を駆使した詩集『魅惑』の諸詩篇がその後産のようにおおむね一九二二年までに現れ、以後は対話篇、エッセイ、講演などの散文作品を主として多産であって、フランス第三共和国の知的代表者として国際連盟を含む公職にも携わり、ドイツセン[b]領下にはパリに留まって非妥協的態度を貫き、解放後の一九四五年七月二〇日死去、ド・ゴールは国葬の礼を以て彼を葬った――。（中略）

彼は定型詩の詩作が終わった後に、「詩への回帰（Retour à la poésie）」という一文を書いている。拙訳で少し長く引用する。

「自分ではわからない謎の回復、青春への回帰によって私は二十年以上離れていた詩に再び感興を覚えるようになった。……再び会話の中のことばの響きに敏感になったことが自分でわかった。ことばの音楽を味わおうとこだわるようになった。私が語を耳にすると、私の中で、自分でもわからない和音的相互依存関係や、皮一枚下まで来ている律動の、まだ声にならない存在が揺れるのであった。シラブルには色が付いてきた。言語のある種の形態、ある種の転回が、おのずと意識あるいは音声の前景にはっきりと現れるようになり、生かしてくれとねだるようになった。この「うたう状態（état chantant）」の始まり、この表現開発のもっとも秘められた春は、演奏の前のオーケストラの楽譜の低い呟きのよう

注 アンリ・ポアンカレ…フランスの数学者、理論物理学者、科学哲学者。一八五四～一九一二年。

に甘美である」。

「詩モード」の基底は「うたう状態」である。その表現は、「ことばの響き」「ことばの音楽」「和音的相互依存関係」「皮一枚下まで来ている律動の、まだ声にならない存在」に敏感になり、「シラブルには色が付いて」きて、「言語のある種の形態、ある種の転回が、おのずと意識あるいは音声の前景にはっきりと現れるようになり、生かしてくれとねだる」ようになる。これを無粋に要約すれば、言葉の非文法的、非意味的といおうか、その素材的な「質」に感覚が開けることである。

私の場合をここで持ち出すのは面[1]はゆいがやむを得ない。詩の訳者として、私も遥かに希薄であろうが、この「うたう状態」を体験した。それは、一九八四年秋のことであったが、私が招待された結婚式のスピーチを考えあぐねて、たまたま現代ギリシャの英訳詩集を手にして、オディッセアス・エリティス[注]の「エーゲ海」を見いだした時から始まっている。この詩は祝婚歌であると私は直観した。そして、各行が現在分詞で終わる歌い出しの節が、浜に寄せては返す波の音に聞こえてきた。

私はここから現代ギリシャの詩をいくつか翻訳し、そしてヴァレリーの訳詩に進んだ。

ヴァレリーは、長く難問に取り組んでなかなか解決ができず、それが力の充溢感と無力感との無際限の往復という地獄のような悪循環そのものになって、とうの昔にうんざりしていたと述べている。彼は四十歳であった。

この格闘は、死後公刊の『カイエ』に生々しく語られている。

私は精神医学に転じてから十八年であった。私は私の方法によって数年で統合失調症の急性状態とそこからの回復過程にはある程度の目鼻を付けえたと信じていた。ことに回復状態はほとんど誰も手を付けていなかった領域であった。しかし、その後の十数年は、次第に激務となった臨床と管理職とに携わりつつ、回復しそこねた患者の慢性状態にどのようにして目鼻を付けるかに苦しんでいた。

①（中略）

ヴァレリーの『若きパルク』は、アレクサンドランという詩型を使って書かれている。一行十二シラブルの押韻詩である。この十二シラブルの一行内でも六対六などの下位の区切りが起こる。行と行との間も、押韻ゆえに二行あるいは四行の関係がキン[c]密である。さらに全詩五百十二行は十六のパラグラフに分かれる。

この形式を日本語訳においてどう変換するかである。

オディッセアス・エリティス…ギリシャの詩人。一九一一～九六年。

国Ⅲ

まず、詩の翻訳は原則的にやはり詩になっていなければならない。では、詩になっているかどうかをどうやってみわけるか。フランス語のように詩と散文との区別をはっきりさせてきた言語文化もあり、英語のように、T・S・エリオット[注]の表現を借りれば、詩と散文の区別は漸層的であって明確な一線はないといわれる場合もある。私は、[2]日本語の訳詩の場合は、日本語の散文の中に引用されて、なお周囲の散文の中に没せずに詩として区別して感得されるかどうかを一つのテストと考えている。これ以上の実行可能な区別を私は思いつかない。（中略）

ではアレクサンドランを日本語にどう移すか。一行十二シラブルは逆立ちしても不可能であり、仮に実現させても殺風景である。

私は、十二拍子を以て十二シラブルに置き換えることはできないか、と考えた。シラブルと拍子とは違う。休止も一拍に数える。基本的に二モーラが一拍であるから、十二シラブルでは二十四モーラになる。これは無理なく一行にできる。なお日本詩の基本が四拍子であることは、その後、音楽研究者の石井宏氏が『西洋音楽から見たニッポン――俳句は四・四・四』（ＰＨＰ研究所、二〇〇七年）において明らかにしておられる。俳句は休止を数えれば四・四・四である。たとえば「なつ／くさ／や／□／つわ／もの／ども／が／ゆめ／の／あと／□」である。和歌は基本的に四×五である。「五」は後に休止を持ち「七」は持たないからである。これに対して日本語の散文は氏によれば切れ目なく流れてゆく「ぐにゃぐにゃ水飴語」である。アレクサンドランの一行を一行に移すことは部分的にはできるが、ただ、長詩全体をそうすることには無理がある。原詩の行にこだわらず、行数が違ってもよいとすればできる。

そこまでしなくとも日本語の基本である四拍子を実現することは、[d]イ論もあろうが、散文の中に置いても詩と認識できるもっともやさしい方法であると思う。

石井氏の指摘される「水飴語」は、室町時代に現れ、現代の歌謡にまで続いている。七・五調は、五・七調と根本的に違う。冒頭の七の後に［　②　］が来ないために言葉の流れが自然になり、「水飴語」への道をなだらかにした。

日本の現代詩の多くが「水飴語」的であり、訳詩のさらに多くがそうである現実を私は否定するわけではない。この傾向は強弱アクセントでなく抑[e]ヨウアクセントを持つ言語に生まれやすいのかもしれない。四拍子の日本詩は関西語では「弱強弱強」、関東語では「強弱強弱」に読まれる傾向があり、これに対して「水飴語」では抑[e]ヨウが前面に出てくるようであるが、私には断定するだけの能力がない。

ただ、「流れ」も日本語の美の大きな一部分であり、「水飴」のたとえは日本語にいささか気の毒かもしれない。以前に

注　T・S・エリオット…イギリスの詩人、文芸評論家。一八八八～一九六五年。

挙げた志貴皇子の「石走る（いはばし）／垂水（たるみ）の上の／さわらびの／萌え出づる春に／なりにけるかも」は拍子と流れがあいまって美をつくり出している。

日本語押韻の試みは現代詩において頻繁になされている。日本語押韻の難しさは、母音体系が簡単であるために、次の行末にたどりつくまでに韻と同じ母音に何度も出会う確率が高いことにある。実際、押韻の効果がはっきりするのは一行が短い詩、たとえば一行四拍子である。

ところで、ヴァレリーという詩人は、脚韻もさることながら、頭韻（アリテレーション）、母音調和（アソナンス、母音の響き合い）が際立つ詩を書くのが特徴である。私は、脚韻よりもこのほうが日本詩の詩作に活かしやすいし、実際によく活用されていると思う。たとえば、鷗外[3]の「沙羅の木[4]」である。

「かちいろの　ねぶかわいしに　／　しろきはな　はたとおちたり、
　ありとしも　あおばがくれに　／　みえざりし　さらのきのはな」

この詩（褐色（かちいろ）の根府川石（ねぶかわいし）[注]に／白き花はたと落ちたり、／ありとしも青葉がくれに／見えざりしさらの木の花）における音の響き合いの一端を抜き出せば「いろ―いし―しろき」「おち―たり―あり（と）しも―あおば―がくれに」「みえざりし―さらのきの―はな」。このように頭韻、母音調和に加えて時に速く、時にゆっくり流れ、時に転調する流れが読み取れる。ちなみに、この詩はボードレール[注]の「不運」の最終節を下敷きにし、それはさらにグレイ[注]の「墓畔の哀歌」に遡ることができる。鷗外が日露戦争の出征にあたって作った、辞世の含みのある詩であって、「森」の中に隠れて見えなかった（群がっては生えず必ず孤独な木であるという）沙羅（さら）の木の花の落花をうたっていることは、「不運」「墓畔の哀歌」と同じ趣向である。

もっとも、フランス語の定型詩でも（当然）下らない詩はたくさんある。形式を原詩に近づけることはこの程度でよいであろう。ギリシャ、ラテン詩以来の伝統として西欧語の詩は三拍子が多いが、日本詩に三拍子は難しいのではなかろうか。

日本語とたとえばフランス語の言語的距離を嘆く必要はないと思う。距離があるからこそ面白いのである。ヴァレリー詩のイタリア語訳をみれば、近縁の言語は、日本詩を日本の方言に訳する場合に似て、滑稽にならないための努力が求め

根府川石…神奈川県小田原市の根府川地区から産出される安山岩で、墓石にも利用される。

シャルル・ボードレール…フランスの詩人。一八二一～六七年。

トマス・グレイ…イギリスの詩人、古典学者。一七一六～七一年。

国

られそうである。

実際の私は、原文を筆写し、朗読、黙読し、そのうちに何かが深部言語意識に届くことを念願するのみである。私はたまたま外国語で患者を診察する機会が少々あり、外国の研究者と語り合うこともあったが、会話の記憶は、いつのまにか、その場にふさわしい抑ヨウ[e]とテンポの日本語になって再生されるのが普通である。翻訳に生理的基盤があると思う理由であるが、そういうことは起こらないという方もおられる。私たちは皆、固有日本語と漢語、最近は日本語と洋語とをたえず「翻訳」しているが、この生理的基盤も同じか似たものであろうかと思う。

最後になぜ私は訳詩であって、作詩ではないのかということを問われそうである。詩人でないことは高校時代に自覚している。素質のなさとしかいいようがないが、また私の器量では、詩人であれば精神科医ではありえなかったような気がする。そして、精神科医という職業は一種の翻訳者、それも少なくとも統合失調症の場合には、散文よりも詩の翻訳者に近いところがありそうに思うことが時々ある。

私のささやかな「うたう状態」は一九九五年に終わった。『魅惑』の最後の詩を訳し終えた数時間後に阪神淡路大震災がやってきた。そして「ぼくは詩はわからないよ」という人の状態ってこれだという状態に私も戻った。それはカラーの写真とモノクロームの写真ほども違っていた。

（中井久夫『私の日本語雑記』による。ただし一部変更した。）

国

問一 傍線a～eのカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるべき文はどれか。その符号をア～エの順で**すべて**答えよ。（例：ア・イ）

a ライ鳴

ア 付和ライドウばかりしていると言われるので、今度からは自分の意見をしっかり述べたい。
イ あの人はシンライできる人なので、金を貸しても必ずきちんと返してくれるだろう。
ウ 登山が趣味なので、いつか富士山頂に光りかがやくゴライコウをこの目で見てみたい。
エ 古代中国の儒教の経書の一つ、『ライキ』からは、古代の習俗や制度などを知ることができる。

b セン領

ア 自分名義の物を持つことは所有だが、名義人にかかわらずその物を支配することはセンユウである。
イ あのセンセイ術師のアドバイスはよく当たると評判で、今日も行列ができている。
ウ センキョ権が二十歳以上から十八歳以上に引き下げられたが、投票率は伸び悩んでいる。
エ 広島市で行われた平和記念式典での、市長による平和センゲンの全文を読んだ。

c キン密

ア アルバイトの応募は市内在住者だけではなく、キンリンの市町村在住者も可とします。
イ ここは以前から自転車の駐車がキンシされている区域である。
ウ 昨夜のキンキュウ警報のおかげで、今朝は寝不足のまま登校したのだった。
エ 「とにかくこの人はキンベンで、それが何よりの長所です」と紹介された。

d イ論

ア 先輩がこの部活の課題としてあげた五つの内容について、イワ感をおぼえた。
イ 人気マンガのほとんどがイセカイ転生ものだが、はずれがないのでつい読んでしまう。
ウ 最近のスナック菓子はどれも似たような味とパッケージばかりで、大同ショウイだね。
エ 今後、新聞を読んで、社会人にふさわしいゴイリョクを身につけていきたいと思います。

e 抑ヨウ

ア 中小企業診断士のヨウセイ課程について、ホームページでカリキュラムを調べてみた。
イ 突然、先輩から告白されてドウヨウしてしまい、聞こえないふりをした。
ウ SNSが普及して以降、日本はフカンヨウな社会になってきたと指摘されている。
エ 中国最長の河川であるヨウスコウは、中国国内では長江と呼ばれている。

問二 傍線1「面はゆい」の読みと意味の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　おもはゆい—場当たり的だ
イ　おもはゆい—気恥ずかしい
ウ　つらはゆい—場当たり的だ
エ　つらはゆい—気恥ずかしい
オ　めんはゆい—場当たり的だ
カ　めんはゆい—気恥ずかしい

問三 空欄①に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　これは「詩への回帰」の揺り戻しであった。
イ　これは「浜に寄せては返す波の音」の揺り戻しであった。
ウ　これが「私の方法」ということだろうか。
エ　これが「急性状態」ということだろうか。
オ　これも「地獄のような悪循環」に近かったにちがいない。
カ　これも「力の充溢感」に近かったにちがいない。

問四 傍線2「日本語の訳詩の場合は、日本語の散文の中に引用されて、なお周囲の散文の中に没せずに詩として区別して感得されるかどうか」を判断する場合、著者はどのような方法が効果的だと考えたか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　十二シラブルを十二音の日本語に置き換え、かつ、一行の日本詩にするよう心がける。
イ　石井宏氏が名付けた「ぐにゃぐにゃ水飴語」をあえて意識的に用い、切れ目のないような一行にする。
ウ　切れ目なく流れるような散文と区別しやすいように、四拍子の日本語による表現を意識する。
エ　五・七調ではなく、七・五調を基調とし、俳句のような音数と拍数にする。
オ　フランス語の行数とは同じでなくても、十二シラブルにはこだわって翻訳する。

問五 空欄②には漢字二字が入る。適切な漢字を文中から抜き出して答えよ。

問六 傍線3「鷗外」は森鷗外であるが、森鷗外の**作品ではないもの**が入っているものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 『舞姫』『山椒大夫』
イ 『阿部一族』『青年』
ウ 『高瀬舟』『草枕』
エ 『寒山拾得』『普請中』
オ 『雁』『興津弥五右衛門の遺書』

問七 傍線4「沙羅の木」という詩の説明として**適切ではないもの**を次の中から**二つ**選び、符号（ア～オの順）で答えよ。

ア 「みえざりし」など文語を使った定型詩であり、七・五調で作られてゆったりしている。
イ 「ありとしも」の「あ」と「あおばがくれに」の「あ」が頭韻として機能している。
ウ 基本的に四拍子で読むことができ、フランス語の定型詩とは別種の趣がある。
エ 外国詩の「不運」と「墓畔の哀歌」の頭韻と転調をそのまま翻案した詩で、母音の響きが良い。
オ 群生しない沙羅の木の白い花が人知れず落ちるさまは、鷗外の辞世のように読むこともできる。

問八 傍線5「なぜ私は訳詩であって、作詩ではないのか」とあるが、著者はなぜ詩の創作ではなく、外国詩の翻訳を手掛けたのか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 精神科医として患者と外国語で話し合う機会があり、精神科医の仕事とは、外国語から日本語へと「翻訳」をする仕事であることを発見したから。
イ 外国の研究者と話し会う中で、外国語を日本語に「翻訳」する際、その場に適したリズムやテンポの日本語がおのずと浮かぶようになり、その記憶が後々まで忘れがたかったから。
ウ 高校時代から詩を創作する才能はあまりないと自覚しており、さらに、精神科医として働き続ける以上は詩人にはなれないと周囲から言われたから。
エ 自分が詩人ではないということは早くからわかっていたが、精神科医として患者と向き合うにあたり、翻訳の仕事も並行してしなければならないことに気付かされたから。
オ 詩を創作する素質があまりなかったこともあるが、精神科医として統合失調症患者の話を聞き取ることは、詩を翻訳する作業と似ていると感じることもあったから。

問九 この文章全体のタイトルとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　フランス詩と日本詩について
イ　フランス詩と日本詩の押韻
ウ　フランス詩の翻訳と現代詩
エ　訳詩体験から詩をかいまみる
オ　訳詩体験から詩を近づける

問十 次の文のうち、本文の内容と合致するものを**すべて**選び、符号（ア～カの順）で答えよ。

ア　ヴァレリーは若き日に詩作から離れ、数学に没頭した一時期があったが、のち、散文など多くの作品を発表した。
イ　「うたう状態」が始まると、言葉の語順や意味に拘泥しなくなり、言葉の音楽性や感覚的なものが優位になる。
ウ　日本の俳句を四・四・四と表現するならば、日本の和歌は四・四・四・四・四であると表現することができる。
エ　日本語は四拍子が基本である。他方、日本の散文はすべて三拍子で書かれており、それは室町時代から続く特徴である。
オ　母音調和は、母音体系が複雑な言語に適しており、母音体系が単純な日本語では十分な効果は期待できない。
カ　フランス語詩をイタリア語に翻訳すると、日本語における関西語のような弱強アクセントが前面に出て面白くなる。

国

三

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

そもそも、おろおろ伝記[注]を尋ね侍るに、①行ひは何の行ひにてもあれ、常に心を澄まして濁すまじきにこそ侍るめれ。吹く風、立つ波につけて、善知識[注]の思ひをなして、常に心を静むべきなり。その中に、昔より、海のほとり、野の間、跡あまた見え侍れど、深山（みやま）の住居ぞ澄みて覚え侍る。されば、天竺（てんじく）・震旦（しんだん）[注]の賢き跡を尋ぬれば、多くは深山の住居なりけり。

かかる数にもあらぬ憂き身にも、松風を友と定め、白雲を馴れ行くものとして、ある時は青嵐の夜、A すさまじき月の色を眺め、ある時は、長松の暁、さびたる猿の声を聞く、ある時は、問ふかとすれば過ぎて行くむら時雨を窓に聞き、ある時は、馴るるままに荒れて行く高嶺（たかね）の嵐を友として、窓の前に涙を抑へ、床（ゆか）の上に思ひを定めて侍るは、B 何となく心も澄み渡り侍れば、それをこの世の楽しみにて侍るなり。

たとひ後（のち）の世を思はずとも、ただこの世[注]一つの心を遊ばせて侍らんも、あしからじものを。海のほとりに居て、寄り来る波に心を洗ひ、谷の深きに隠れて、嶺の松風に思ひを澄まさむこと、後の世のためとは思はずとも、澄み渡りて聞こゆべきにや。いはむや、思ひをまことの道にかけて、濁れる人々を遠ざかり、心を憂き世の中に留めずして、世の塵に汚れじと住まはんは、などてかはあしく侍るべき。あさましや、眼（まなこ）の前の陽炎のあるかなきかの世の中に、仮の名に耽りて、長き夜を送り、偽りの色にほだされて、C 昔の五戒[注]の報いを行方なくなし果てんこと、悲しくも侍るかな。しかるを、無明[注]の眠り深くして、D この世をいみじとしもは思はねど、昨日もいたづらに過ぎ、今日もむなしく暮れぬるぞかし。たそかれになりゆく時にこそ、いかに侍るやらん、同じ野寺の鐘なれど、夕べは音（こゑ）の悲しくて、涙も止（とど）まらず驚かれ侍り。あはれ、仏の助けにて、常にかやうにのみ侍れかしと嘆けども、世々を経て思ひ慣れにける心なりければ、ひき続くことも難くてのみ明かし暮すこそ、悲しとも愚かに侍れ。②願はくは、釈迦如来、阿弥陀（あみだ）仏、すべては四方（よも）の仏たち、昔の誓ひ[注]をかへりみて、哀れみを下し給へとなり。

（慶政『閑居友』による。ただし一部改変した。）

伝記…ここでは高僧伝・往生伝など、仏教において功徳を積んだ人々の伝。
善知識…人々を仏の道へ誘い導く人。
震旦…中国の異称。
この世一つ…現世のみ。
昔の五戒の報い…前世で在家信者の戒律を守って再び人間に生まれたという報い。
無明の眠り…悟りの光明に会えず暗がりに眠るという例え。
昔の誓ひ…各仏が仏となる前に立てた衆生を救う願い。

国

問一　二重傍線A「すさましき」二重傍線B「何となく」二重傍線C「ほだされ」の解釈として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

A「すさましき」

ア　興ざめした感じの
イ　あきれるほど強い
ウ　はげしく強い
エ　恐ろしい
オ　荒涼とした

B「何となく」

ア　たまたま
イ　平凡に
ウ　これというわけもなく
エ　一面に
オ　かすかに

C「ほだされ」

ア　しばられ
イ　みせられ
ウ　だまされ
エ　ながされ
オ　うかされ

問二 二重傍線Ｄ「この世をいみじとしもは思はねど」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　この世をひどいとはまったく思わないが
イ　この世をかならずしもひどいとは思わないが
ウ　この世をすばらしいとはまったく思わないが
エ　この世をかならずしもすばらしいとは思わないが

問三 波線Ａ「れ」と同じ意味で用いられる「れ」をもつものを、次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　この奉る文を取れ
イ　宿直ばかりを、簀の端わたり許されはべりなむや
ウ　「いかにせむ」とばかり言ひて、ものも言はれずなりぬ
エ　いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころかな
オ　大幣と名にこそ立てれ流れてもつひによる瀬はありといふものを

問四 傍線①「行ひは何の行ひにてもあれ、常に心を澄まして濁すまじきにこそ侍るめれ」とあるが、どうあることが考えられるか。**本文に照らして適切でないもの**を次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　世の塵を避けて暮らすこと。
イ　松風を友とすること。
ウ　色にほだされること。
エ　荒涼とした山猿の声を聞くこと。
オ　深山に住居を定めること。

国

問五 傍線②「願はくは、釈迦如来、阿弥陀仏、すべては四方の仏たち、昔の誓ひをかへりみて、哀れみを下し給へとなり。」とあるが、どのようなことでそのように願うのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 長い年月を経て怠惰になった気持ちのために、ちらちらと光る炎のような人生に埋没して、再び人間に生まれてしまうため、仏に手を差し伸べてほしいということから。

イ 長い年月を経て怠惰になった気持ちのために、心を澄ませて道心を得たとしても元通りになってしまうため、仏に手を差し伸べてほしいということから。

ウ 長い年月を経て怠惰になった気持ちのために、世間を離れて生きようとしても元通りになってしまうため、仏に手を差し伸べてほしいということから。

エ 長い年月を経て怠惰になった気持ちのために、後世のためを思わず、ただ単に心を澄ませてしまうため、仏に手を差し伸べてほしいということから。

オ 長い年月を経て怠惰になった気持ちのために、昨日を無為に過ごし、今日も無駄に過ごしてしまったため、仏に手を差し伸べてほしいということから。

（このページは白紙です）

《注　　意》

採点・集計などのさいに受験番号の読み間違いが生じないように，受験番号はつぎの点に注意して記入すること。

1．受験番号は２箇所に記入する。

2．HB の鉛筆・シャープペンシルを使って，１マス１字ずつはっきり書く。

3．ほかの数字とまぎらわしくないように書く。

良い例	1	3	4	5	6	7
悪い例	1 (7)	3 (8)	4 (6) 4 (9)	5 (6)	6 (4)	7 (1) 7 (9)

それぞれ（　）内の数字と誤解されやすい。